

ハンガーゼロ (日本国際飢餓対策機構) は、イエス・キリストの精神に基づいて活動する非営利の民間海外協力団体 (NGO) です。1981年に誕生して以来、世界の貧困・飢餓問題の解決のために、自立開発協力、教育支援、緊急援助、海外スタッフ派遣、飢餓啓発を行っています。現在は、国際飢餓対策機構連合 (Food for the Hungry International Federation) の一員として、20カ国、国内外の80のパートナーと協力し、アジア、アフリカ、中南米の開発途上国で、「ここからだの飢餓」に応える活動をしています。

わたしから始める、世界が変わる

1分間に17人(内12人が子ども)
1日に2万5,000人が
1年間では約1,000万人が
飢えのために生命を失っています

2025

5

No.418

Hunger Zero News

ハンガーゼロ・ニュース

キングダムビジネスが横浜に移転、ネットショップも刷新



ズの4種が各2g×10包/袋入り
新しくなったネットショップ(下記QR参照)にて、お支払いはクレジットカード、コンビニ払いも可能です。はちみつも各種販売を開始しました。ぜひご覧になって下さい。

【新発売】南インドのオーガニックティーや世界各地のはちみつを販売!

新発売のフレーバーティーセットが送料込2,300円です。(ラベンダーローズマリー、グリーンカモミール、グリーンレモングラス、ブラックロー

【お申込み】
ウェブでのご注文
QRコードから▶
www.kingdombusiness.jp
電話注文 / お問い合わせ:
080-9126-7701
株キングダムビジネス
横浜事務所 代表:水野行生



オクダデザインプロジェクト 施工例 デザイナーズマンション



OKUDA DESIGN PROJECT.

貸したい時も、借りたい時も。不動産賃貸のご相談は—

株式会社
オクダコーポレーション
〒197-0003 東京都福生市熊川447-9
042(552)0102
インターネットでお部屋探し https://okuda-re.co.jp

サポーターお申込み欄 FAX072-920-2155

氏名	フリガナ
(TEL)	
住所	〒
申込日	年 月 日 NL418号
<input checked="" type="checkbox"/>	下記から希望されるものをお申し込みください
<input type="checkbox"/>	ハンガーゼロサポーターとして協力します。 ①毎月()円(1口1,000円) ②一時募金として 円協力します。
<input type="checkbox"/>	継続募金(JIFH サポーター)として協力します。 毎月()円(1口500円)
<input type="checkbox"/>	チャイルドサポーター(子ども1人毎月4,000円)の説明書(申込書)を送ってください。
<input type="checkbox"/>	郵便自動引落し申込書を送って下さい。
<input type="checkbox"/>	その他の銀行自動引落し申込書を送って下さい。

上の申込書をコピーして、必要事項を記入の上、FAX又は郵送にて大阪事務所までお送りください。確認書類等を送らせていただきます。お電話やウェブサイトでも申し込みできます。

ハンガーゼロサポーター 現在...5301口

※記入後にスマホで撮影し、下記メールアドレスにお送り頂いても受付いたします。



西南学院大学

フィリピンワークCAMP

Hunger Zero News 今月号の内容

- ミャンマー地震被災者緊急支援 P.2
- イーワイエス親善大使就任インタビュー P.3
- 西南学院大学フィリピンワークキャンプ参加学生の体験記&活動地の報告 P.4-7
- キングダムビジネスから商品案内 P.8



みなみななみさん

イラスト展が盛況に

3月18日から22日まで、ハンガーゼロ主催による「みなみななみイラスト展in大阪」が、日本ナザレン教団大阪桃谷教会で開催され、支援者を含む120人余りの方が足を運んでくださいました。

みなみななみさんは、貧困と飢餓の撲滅また災害被災者や難民支援に取り組むハンガーゼロ(日本国際飢餓対策機構)の活動に共感、団体の機関誌に世界の食料問題や貧困の現実を子どもたちにわかりやすく伝える漫画をはじめ、絵葉書や開発教育まんが(書籍)などの作品で応援して下さっています。20日(祝)にはハンガーゼロ親善大使の森祐理(福音歌手)さんとウクライナで支援活動をしている王スタッフ、緊急支援担当の申スタ



ッフによるトークイベント「被災者支援の現場から」が午前と午後に行われました。用意した席が満席となる中、戦禍にあるウクライナの人々の生活や能登半島地震、トルコ大地震の緊急・復興支援の様子や経験が語られました。

【お知らせ】今秋の世界食料デーチラシに、みなみななみさんから作品を提供していただくことになりました。

■発行者 清家弘久

■発行所 一般財団法人 日本国際飢餓対策機構



Webサイトアドレス <http://www.hungerzero.jp>
eメールアドレス general@jifh.org
フェイスブック facebookでハンガーゼロで検索

■募金方法 ※各種方法で随時受付中、詳しくは電話やウェブサイト
①郵便振替 00170-9-68590 一般財団法人日本国際飢餓対策機構
②他の金融機関からの自動振替③クレジット、デジタルコンビニ



●Vポイントを利用して「南スーダン・マブイ小学校給食支援」ができます。現在までに1,816,511ポイント(円)のご協力(26,554件)がありました。

大阪 〒581-0032 八尾市弓削町3-74-1

(広島/沖縄) TEL (072)920-2225 FAX (072)920-2155

東京 〒101-0062 千代田区神田駿河台2-1 OCCビル517号室

(東北) TEL (03)3518-0781 FAX (03)3518-0782

愛知 〒460-0004 名古屋市中区新栄町2-3 YWCAビル6F

TEL (052)265-7101 FAX (052)265-7132

USA Ainote International c/o Mr. Takehiko Fujikawa

TEL (510)568-4939

AMERICA合衆国の方はHP QRコードから申し込み下さい。クレジット決済が可能になりました。

jifh.ainote@gmail.com

HP <https://ainote.org>



【本紙の送付についてのお問合せは】左記eメールアドレス、Webサイトのお問い合わせ、または大阪事務所までご連絡ください。



親善大使就任インタビュー

昨年ハンガーゼロ親善大使に就任されたソングライター3人の兄弟ユニット「イーワイエス」の関栄理哉さん(長男)と関義哉さん(次男)のお2人にお話を伺いました。同ユニットは、2014年に彼らが所属する京都グレースバイブルチャーチで結成。イーワイエスの名前は、3兄弟の栄理哉、義哉、真哉の頭文字のEYSを由来としつつ、Eには関西弁の(イーワ=good)、YSには(イエス様)合わせて「goodなイエス様」の思いも重ねられているそうです。3人はそれぞれプロの演奏家、楽曲制作、音楽プロデューサー等としてテレビやラジオで活動を続けておられます。



イーワイエス
関栄理哉さんと関義哉さん

“応援ソング”で支援の輪を広げます！

楽曲を作っておられるので、僕らもハンガーゼロへの支援の輪を広げる曲や子どもたちが簡単に歌える曲なども作ってみたいです。(同栄理哉さん)

世界食料デー京都大会の出演で感じたこと

ハンガーゼロスタッフの飢餓啓蒙講演で食品ロスの話がとても印象に残りました。僕は実家を離れて一人暮らしをするようになってから、その日に必要な食べ物しか買わない生活をしています。だからそれで良かったんだなと思いました。実家にいたときはそれこそ恵まれ過ぎて食品ロスなんて考えていませんでした。(同栄理哉さん)

飢餓は体の栄養不足とともに、人の精神面といえますか。愛が足りていない心の問題にも原因があることを教えていただきました。人間には体と心の両面の充足が大事なんだと改めて考えさせられました。(同義哉さん)



現在の演奏活動について

地元の医療関連会社のPRソングを制作したことを契機にそうした仕事も請け負ったりしています。PRソングが出来て会社の催事や地元の政治家の会合などで演奏することもあります。また地元のご当地ソングを手がけたりもしています。今後はそうした地域の催事などで演奏の機会にハンガーゼロの活動についてアピールしていければと考えています。(同栄理哉さん)

私たちの教会では「マルシェ」という地域交流プログラムを定期的に開催して近隣の方々に来ていただいています。当日は手作りのアクセサリ、バック類の販売やキッチンカーで食べ物を出して、イーワイエスの演奏も聴いていただきます。できれば今後「ハンガーゼロタイム」のような形で、演奏だけでなくハンガーゼロの動画を上映などして募金の呼びかけもしていきたいですね。(同義哉さん・栄理哉さん)

12月のクリスマスももちろんですし、メンバー誕生月の12月(長男)、4月(次男)、8月(三男)に開催しているワンマン・コンサートに毎回100名位が来てくださいますので、そうした機会でも支援をアピールしていければと考えています。(同栄理哉さん)

親善大使としての取り組み

イーワイエスの歌は聖書の言葉からインスピレーションを得て作っています。その曲をライブ演奏やCDを通じて人々の心に神様の愛や生きる希望を届けたい、教会にも足を運んでほしいと願ってきました。ハンガーゼロの心の飢餓もなくしていこうというメッセージは、イーワイエスの音楽の方向性と共通するところがあると思います。だから僕たちも改めて襟を正してハンガーゼロに貢献していきたいです。(同義哉さん)

親善大使のナイトdeライトさんと白靴慧海さんが素敵な

世界食料デーやチャイルドサポーターの支援催事などに、3兄弟のユニット「イーワイエス」を招こうと思われる方は、ハンガーゼロの大阪と東京事務所までお気軽にご相談ください。



イーワイエスのプロフィールと関ヨシヤ公式サイト↑

関 栄理哉 [1987.12.14生]
(作詞・作曲・ボーカル・編曲・ボーカルトレーナー)
大阪音楽大学ポピュラー専攻卒。
テレビ・ラジオCMソング制作 歌唱担当。
自身もシンガーソングライターとして活動している。

関 義哉 [1989.04.07生]
(ボーカリスト/ダンサー/シンガーソングライター)
滋賀大学 経済学部卒。元 新選組リアン リーダー。
テレビやラジオ、舞台、コンサート等、様々なステージでの活動を経験。

関 真哉 [1993.08.01生]
(サクソ/ピアノ/コーラス)
大阪音楽大学ジャズ、ポピュラー専攻卒。
全国各地サポートライブ、ホテルやBarでのイベント演奏、レコーディング、トラックメイキング等も行っている。



緊急支援チームの活動を応援、募金受付!!

ハンガーゼロは、3月28日にミャンマー中部で発生した地震で被災された人々を救援するため、海外パートナーの韓国国際飢餓対策機構(KFHI)の緊急支援活動に協力、募金を受け付けています。

KFHIの緊急支援チームは、同30日に激震地のマンダレー市(ミャンマー第2都市)南部に活動拠点を設置。観光地として有名なインレー湖周辺でも活動を開始しました。

この活動予算は約1,500万円に策定しています。



【実施中の支援プログラム】

- ①3月30-31日：インレー湖地域500家庭食料キット支援(米、洗剤、塩、酢、ライター、ミウオン、食用油、ラーメン、生活必需品キットなど)
- ②3月31日：マンダレー地域60家庭食料キット支援(米、



地震で壊れた現地のキリスト教会

- 油、麺、パン、缶詰魚、飲料水)
 - ③インレー湖地域の第2次食料支援として米1,000袋配布
 - ④マンダレー地域の40家庭に食料・衛生キット(飲み水、米、油、麺、パン、缶詰魚、歯ブラシ、シーチャックなど)の配布
- ミャンマーは6月以降は雨季に入り、住居を失った被災者の生活はより厳しくなります。ぜひ応援をお願いいたします。

募金はクレジットカード又は郵便振替で

左のQRコードからすぐにオンライン募金ができます。クレジットカードやコンビニ決済がご利用できます

【郵便振替での送金は】
00170-9-68590
日本国際飢餓対策機構「ミャンマー緊急募金」明記

備蓄をしながら社会貢献

救缶鳥
Kyu-Can-Cho

皆様から回収された救缶鳥は各地に飛んでいきました！

食料が不足している、国内外の豪雨・地震等の災害被災地や、海外の飢餓地域等へ送られました。

おいしいと夢をお届けします。
株式会社パン・アキモト
since 1995

〒329-3147
栃木県那須塩原市東小屋295-4
TEL 0287-65-3351

パン・アキモト 検索



西南学院大学のワークキャンプが、2025年2月21日～27日にハンガーゼロの現地パートナーであるFHフィリピンの活動地で実施されました。多数の応募者の中から選考を経て参加した学生14名は、小学校の訪問とマングローブの植樹、生活体験、地元教会での奉仕活動や交流などを通して、多くの人たちと出会い「自分の当たり前」を揺さぶられる経験をしました。



印象に残ったエピソードと感想



7日間で教えてくれたこと

法学部 国際関係法学科3年 大塚久未

活動を通して私が最も強く感じたのは、「与える」つもりでいた自分が、実は多くを「与えられていた」ということです。活動を始めた当初、「自分が何かを与える側だ」と考えており、準備段階からどうしたらフィリピンの子どもたちに保健衛生とその習慣化の大切さを伝え、折り紙を楽しんでもらえるかを模索し、現地でも何かを届けることに重きを置いていました。

だからこそ、子どもたちに初めて会うときは緊張し、身構えていたのですが、その緊張はすぐに解けました。子どもたちは笑顔で私の名前を呼び、積極的に話しかけてくれたからです。いつの間にか「与える側」としてではなく、一人の人間として彼らと関わっている自分に気づきました。特に印象的だったのは、小学校を訪問したとき、子どもたちから日本の国旗を振って歓迎され、私たちがダンスパフォーマンスや歯磨きスキット、手洗いダンスを披露すると、歓声と拍手が沸き起こりました。

ステージから見た子どもたちの表情には、私が抱いていた「貧しさ」のイメージとはかけ離れた、純粋な喜びが溢れていました。さらに、ある子どもが自分の大切にしていたアクセサリをプレゼントしてくれたことに強く胸を打たれました。物質的には決して恵まれた環境とは言えないかもしれませんが、

しかし、相手を思いやり、惜しみなく分かち合うその姿勢は、私に本当の「豊かさとは何か」を問いかけてきました。

私はこの経験を通じて、物質的な充足だけが豊かさではなく、他者を思いやり、行動に移すことこそが真の豊かさであり、愛なのだ実感しました。そして、自分に余裕がない時でも、誰かを思いやる気持ちを忘れず、行動できる人になりたいと強く思うようになりました。今後は現地で得たこの気づきを原動力にして、貧困をはじめとする国内外の社会問題に「自分はどうかかわるのか?」という問いを持ち続け、具体的な行動を積み重ね、いつか大きな変化を生み出す一因になりたいと思います。



フィリピンで教わったこと

法学部 国際関係法学科2年 寺地優佳

私は、小学生の頃から世界の貧困について関心を持ち「いつか海外ボランティアに参加して役に立ちたい、自分の目で現状を知りたい」という思いがあり、応募しました。

フィリピンに行く前までは、自分自身が恵まれた日本で生活しているからこそ、劣悪な環境で生活しているフィリピンの子どもたちと自分とを無意識のうちに比較し「かわいそう」という考えを持っていました。しかし、子どもたちと触れ合っていく中で私の考えが間違っていたことに気づかされました。彼らにとってはあたりまえの環境の中で普通に生活しているのであり、決してかわいそうな状況ではなく、かつ私たちが何かを提供する側でもなかったということです。学校や家庭訪問をした際も子どもたちは満面の笑みで明るく話しかけてくれます。日本の子どもと同じように友だちと笑い合い遊んでいます。その無邪気さに私は幸せ

の価値など誰にも測り得ないものであると学びました。世界的に見ると、彼らは住んでいる家や周囲の環境に恵まれてはいないかもしれませんが、確かにそこには「かけがえない幸せ」が存在していました。このワークキャンプの目的は子どもたちを助けるためだけに活動しているのではなく、自身の偏った考えに気づき、文化や価値観の違いを尊重しながら同じ立場で同じ時を過ごし、新たな課題を発見することに意味があるのだと気づくことができました。貧困という現状を今すぐ私たちが変えることは出来ませんが、まずは現状を知ること、それが貧困解決への第一歩になると思います。このワークキャンプへの参加は私の固定概念を覆す、人生を変える大きな出来事となりました。最後になりましたが、この様なプログラムに参加させていただいた関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

隣人であるために

法学部 法律学科1年 上野航祐

活動中、最も心に残ったのは、現地の小学校を訪問した際、子どもたちから熱く歓迎を受けた瞬間です。

見ず知らずの僕たちを、なぜ彼らがあんなにも温かく迎えてくれたのか、不思議で仕方ありませんでした。この疑問は訪問後も僕の心に残り続け、やがて振り返りの時間の中で解消されました。



今回のボランティアでは、一日の活動を終わると「西南タイム」という振り返りの時間が設けられていました。その中で、劉先生が語ってくださった「隣人」の定義についてのお話が、特に印象に残っています。劉先生は、善きサマリア人のたとえ話を通して、僕たちが誰かの「隣人」としてどうあるべきかを教えてくださいました。たとえ話はこうです。

ある人が旅の途中、強盗に襲われ、持ち物を奪われた上、傷つき倒れてしまいました。瀕死の状態の彼を見た宗教指導者の祭司は、何もせずに通りました。続いて神殿で奉仕するレビ人も彼を見ましたが、同じように見て見ぬふりをしました。しかし、当時ユダヤ人と仲が悪かったサマリア人だけが、彼を助けたのです。サマリア人は傷の手当てをし、自分の口バに乗せて宿屋へ運び、さらに宿代を払い、彼が回復するまでの世話も頼みました。劉先生は、この話に登場する3人のうち、誰が本当に襲われた人の「隣人」であったかを問いかけました。それはもちろん、傷ついた人に手を差し伸べたサマリア人です。

このたとえが教えてくれるのは、「隣人」とは、国籍や人種に関係なく、困っている人にどのように接するかによって

決まる、ということです。もちろん、子どもたちはそんなことを意識して行動したわけではないと思います。しかし、彼らが見せてくれた「関わろうとする姿勢」こそ、まさに良き隣人の姿そのものでした。それは子どもたちだけではありません。今回のボランティア活動を通して、私たちを支えてくださったFHの方々も皆、親切に接してくださいました。振り返れば、僕自身もこれまで、出会ったフィリピンの方々の印象だけで、「フィリピン人は皆優しい」と勝手に思い込んでいました。しかし、これはもちろん危険なことです。同じように、誰もが他の国の人々に接する時、少なからずその人が「国の印象」を左右する可能性があります。だからこそ、僕はこれからも、海外の方と接する際には、自分の行動が「日本人の印象」にもつながることを意識し、良き隣人であるように努めていきたいと思っています。



どんな世界で生きたいか

外国語学部 外国語学科1年 山岡実生

私がこの活動に参加した目的の一つに日本では見ることができない貧困地域の現状を自分の目で見るということがありました。フィリピンへ行く前にも貧困問題について調べたことがあり、日本とは全く異なる環境で暮らしている人たちがいるということは知っていたつもりでした。しかし、私が生活体験でいった場所は衛生環境が整っておらず、ゴミの山の上で暮らしている人もいました。最初そこを訪れた際にもショックを受け日本との違いに言葉を失いました。

しかし1日をそのコミュニティの中で過ごすうちに、初めて会う私たちを迎え入れ、いろいろな場所に連れて行ってくださり、本当にいろいろな体験をさせてくださったフィリピンの人々の温かさと、彼らの笑顔を見て、経済的に豊かであることが幸せではないのだなと感じました。私は西南タイムで聞いたある話がとても心に残っています。「フィリピンと日本のどちらにも良いところと良くないところがある。この研修を終えて、自分がどんな世界で生きていきたいかビジョンを見つける、考えることが重要である。」

今までの自分だったら今の日本で生きることが幸せなことだと考えていたと思います。しかし、7日間をフィリピンで過ごした今、完全に日本で生きることだけが幸せとは思いません。まだ明確な将来の目標が定まったわけではないですが、いつかフィリピンで出会ったすべての方に恩返しできるように、自分にできることを見つけたいです。



活動中のこぼれ話

経済学部 経済学科2年 志熊真梨

フィリピンに到着した日の空港からの移動中、タワーマンションが多く立ち並んでいました。しかし、少し車を走らせると、舗装されていない道路の多さや街並みの様子から経済格差を感じました。また、マニラ大聖堂を訪れた際、都市部で観光客の方が多い場所でしたが、「お金をください」とお願いする現地の子どもたちを見かけ、とても胸が痛み、経済格差は解決すべき問題であると改めて実感しました。



法学部 国際関係法学科1年 釘丸倫太郎

サンディエゴ要塞を見学した。フィリピンはスペイン、アメリカ、日本に統治された歴史を持つ。要塞内には日本統治時代に日本軍がフィリピン人やアメリカ人を虐殺した洞窟があり、



生々しい写真や模型が展示されていた。私は日本人として申し訳なく思うと同時に、日本では詳しく学ぶ機会が少なかった事実に衝撃を受けた。また、日本の戦争資料館を訪れる海外の方々に対し、歴史と向き合う姿勢に敬意を抱いた。

外国語学部 外国語学科3年 紅露理帆

教会での礼拝は想像していたものとは違い、なんとバンド演奏で私たちを迎えてくださいました。FH本部事務所での送別会後、ホテルへと帰る車内ではFHスタッフとダンス曲の“What Makes You Beautiful”を歌いました。曲が終わると同時にホテルに着いたのを覚えています。どちらの瞬間も心がとても揺さぶられました。音楽の力は言語の壁をも越えると確信した瞬間です。



FH=国際飢餓対策機構

これまでの私・これからの私

国際文化学部 国際文化学科2年 清水琴花



これまでの私は、大学で国際問題や異文化理解などについても学び、貧困や国際協力に関心を持っていましたが、「自分が取り組んだところで何も変わらないのではないか」とどこかで感じていました。しかし、この経験を通じて「小さな行動でも、人となることが大きな意味を持つ」と実感しました。これからは日本にいる間も自分にできることを探し続け、学びを深めながら、再び国際協力の現場に関わる機会を作りたいと思います。

経済学部 国際経済学科3年 松田萌香

私はサークルにも属しておらず、これといって秀でたものもありませんでした。ただ大学生活の内に海外でしかできない体験をしたいという漠然とした目標を抱いているだけでしたが、2年次に履修していた東南アジア経済の授業でフィリピンについて興味を持ち、現地の状況を自分の目で見たいと思い応募に至りました。私は子どもの貧困や教育について関心があるため、今後は現地が教えてくれたことをさらに探求していきたいと考えています。



経済学部 国際経済学科2年 竹田美賛



今回の活動が、私にとって初めての正式なボランティア経験でした。これまで受け身でいることが多く、自ら行動を起こすことに消極的でしたが、今回は主体的に考え、行動できたように感じました。これを一度きりで終わらせるのではなく、今後も自分ができることを考え、小さなことにも誠実に取り組む姿勢を大切にしていきたいです。

法学部 国際関係法学科1年 瀬尾佑

これからの学生生活もボランティアに打ち込みたいです。フィリピンで感じたことの一つに教育の重要性があります。それは世界各国どこでも共通のものであると感じているので、自分にできることを一つでも人のために使えればいいなと考えています。



法学部 法律学科2年 川口冬羽

私は大学1年次から寮生の半数が留学生である国際寮に住み、2年次はRA（レジデントアシスタントという役職）として寮の運営やイベントの企画に携わりました。将来的な目標はまだ定まっていませんが、様々なことに主体的に挑戦することです。



法学部 法律学科1年 福原沙弥

「日本に戻っても、フィリピンで出会った一人ひとりに“あなたは今どこにいますか？どう生きていますか？”と聞かれていると思って生きて欲しい。」これは、西南タイムという振り返りの時間に引率の方がおっしゃった言葉です。活動を終えて日本に戻ってきてからしばらく経ちますが、「今、彼らはどうしているのだろうか？その暮らしの、だけれど幸せに満ちた生活をしているのだろうか。」と毎日考え、フィリピンで出会った方々を忘れたことは一度



もありません。そして、その後には必ず「私はどうだろう、彼らに恥のない生き様だろうか？」と自分に問います。私はこれからも、このことを胸に刻み、常に自分に問いかけながら生きていこうと思います。

外国語学部 外国語学科1年 室井亜梨沙

楽しそう、やってみたく感じたことは何でもいから挑戦してみる、ということを目指して大学に入学しました。このボランティアも入学前から挑戦したいことの一つでした。海外でのボランティアは人生で初めてのことであったので、応募するか悩んだこともありましたが、恐れずに挑戦したことで世界を見ることができ、考え方が変わり、想像以上の成長をすることができたと私自身感じています。そして、かけがえのない最高の仲間にも出会え、挑戦して本当に良かったです。これからも情報のアンテナを多く張り、沢山の事に挑戦し続け、マラボン小学校に植えたマングローブの木のように根を広げ、たくましく成長していこうと思います。



Hunger Zero 12年間にわたりチャイルドサポーターの支援を行ってきた、フィリピンのマトノグとスラの地域での支援が5月末で終了を迎えます。現地を訪問してこれまでの協力を感謝を伝えるとともに支援の成果を見せて頂きました。

～支援終了前のマトノグとスラを訪問～ 希望をもって課題解決に取り組む姿

マトノグでは、FHと協力して価値観について学ぶクラスを実施しているマトノグにある教会を訪問し、元支援チャイルドから話を聞きました。高校を卒業して数年経っていましたが全員が自分のサポーターだった方の名前を覚えていました。そのうち2人は、サポーターの方が手紙で励ましてくれたことがとても大きな支えとなったと語ってくれました。元支援チャイルドたちは教会やFHの活動で活躍しており、3人が村議会のユースリーダーに選出されて、コミュニティのこれからを担っていく存在となっていました。



マトノグFHファミリーデー



スラの子らが感謝の手紙

スラでは村長をはじめ村議会議員、牧師、FHボランティアの方々からお話を伺いました。スラのコミュニティは、良い自治を行っているコミュニティに国から贈られる賞を2年連続で受けています。元チャイルドは、サポーターさんが毎年欠かさず誕生日にカードを送ってくれたことがとても嬉しかったと言います。大学へは舟とバスで5時間かかるけれど卒業まで学びたいと願っていました。母親は、借金が必要な時があるが卒業まで支えたいと言っていました。

どちらのコミュニティでも自分たちの生活向上に希望を持っている人たちに会い、官民が連携して課題解決に取り組んでいる様子を見ることができました。ハンガーゼロのパートナーであるFH フィリピンがチャイルドサポーターの支援終了後もしばらく事後点検を続けていきます。

報告：海外事業部 浅野陽子 (CAMP 同行)